

# 無常の真意とは

—唐木の言葉より考える—

191C00073 立正大学文学部哲学科2年 内山栞

はじめに

本稿は日本の文芸評論家、思想家である唐木順三（1904-1980）の見解を読み解き、そこから無常の真意を探ることを目的とする。本稿の道筋としては、まず、なぜ「無常の真意」を探ることが重要であるのかを述べ、無常の先駆けとなった「はかなし」について論じ、如何にして「はかなし」が無常へと変わったのかその変遷を辿る。そして、鴨長明（1155-1216）の著書『方丈記』における無常について考察すると共に、唐木の著作で語られる無常について、その真意に迫る。

本稿において、唐木順三の『唐木順三ライブラリーⅢ 中世の文学 無常』（2013）を主とするほか、鈴木大拙の『日本的靈性 完全版』（2010）、西田幾多郎の『善の研究』（1950）を参考文献として用いることを予めここに提示しておく。

## 第1章 なぜこの問題が重要であるのか

先の問題を設定した理由として、私自身が無常という言葉の真意をこれまで十分に理解していなかったということが挙げられる。無常観という言葉は高校までの古典文学を学ぶ中で幾度となく教えられてきた。しかし、ここにきて唐木順三の著作と出会い、無常/無常観という言葉の認識が取って代わられたのであった。その衝撃はえも言われぬものであったのである。それについて本稿を執筆する中で、私が無常を本当に理解できているのかを今一度示したいと思う。そして、これは恐らく後の卒業論文制作にも大きく関わって来るであろうと考えるゆえに、一時の気も抜けないのである。

これまでの私の、無常に対する認識とはどのようなものであったか。それは、端的に言うとうと、芸術的であるとか、日本的、風流のある雰囲気という印象であった。無常というのであるから、「常ではない」世というのを想像し、一つの地点に留まらず、どこまでも漂流する、というイメージが強い。また、古典作品の影響で、情緒的なものや詠嘆的なものをイメージしがちであった。しかし唐木によると、この、情緒的なもの、であったり詠嘆的なものであったりといった感傷的な要素は無常の特徴ではないのだという。唐木はこれについて、次のように述べている。

そして結論をさきに書いてしまえば、「はかなし」という言葉がふくんでいる王朝的な心理と情緒が王朝末から中世にかけて、「無常」に急勾配で傾斜してゆく跡を証してみたいのである。言ってみれば、王朝の宮廷的、女性的な心理や感情では、どうにも始末に負えないような事態が現実に出てきて、この事態に対応する言葉を求めながら、急には果しえずに、なお旧来の「はかなし」に頼っていたが、「常ならぬ世」という、これも王朝期にかなり多く使われている言葉、仏教的色彩をもった言葉と結びつき、「常ならぬ世」を自身で、具体的に、実感的に体験した人々、現実の事態の当事者としての男性によって、「無常」という言葉が、おのずから生み出されてきた、と、私はそう思う。(唐木「無常」 p.2520.13-p.2530.7)

唐木は論文「無常 はかなし」の序においてこのように予め結論づけている。つまり、先に言ったような、情緒的であるとか、詠嘆的なものであるような哀感的な表現は、無常ではなく、「はかなし」という言葉の特徴なのであるという。そして、無常について言えば、「現実の事態の当事者として」経験した男性によって「無常」という言葉が自ずと生み出されてきたのであるという。したがって、無常という言葉の先駆けとして「はかなし」という言葉があるのであり、「はかなし」から無常の言葉の変遷を探ることが、無常の真意を探る第一段階となる。また、それを探ることによって、私が無常という言葉の意味を捉え切れていなかった理由が分かるのではないだろうかと思う。ゆえに、次章では「はかなし」から無常への変遷を探ることとする。

## 第2章 はかなしから無常の変遷

前の章の引用の通りで、「はかなし」から無常という言葉に移り変わってゆく所以は、実感的に体験した人々によって自ずと生み出されたことにある。具体的に言うと、戦の殺伐とした世の中の空気によってである。平安時代ごろの『蜻蛉日記』や『紫式部日記』、『源氏物語』、『和泉式部日記』など、男女の仲、つまり「世の中」を題材にした物語が多く、女流文芸の発展が花を咲かせていた。そして、そこにおける情緒的、詠嘆的な哀表現としての「はかなし」が出てきたのであった。しかし、それがいつの日か動乱の時代に移り変わった時、突如として無常に変わってゆく。

(前略)今日はひとの身、明日はわが身、予測できない運命というように、人心に軌範なく、世に道理のないことが、末法、末代の実感であった。(唐木「無常」 p.3340.3-4)

(前略)いわば、限界状況に臨んでの「世」は、一方では殺戮、強姦、掠奪勝手次第という獣性を発露させるだろう。他方では「人間は是生死無常、芭蕉泡沫のさかひ」にあることを気付かせるだろう。(中略)そこでは、人も世もともどもに無常を露呈している。(唐木「無常」 p.3340.17-p.3350.4)

後の引用文の、「世」は中世女流文芸で示されたような「男女の仲」ではもちろんなく、唐木の言葉で言うと「兵」の実存的体験、つまり、武士たちの戦における世の中のことである。殺伐としていて、いついかなる時も決して気を抜くことが許されない渦中にいて、ただ戦において死ぬことだけが決まっている。「兵」であるがゆえに、死ぬことは想定内であり、反対に生きていることがいわば万一の事態であるとさえ言える。この箇所について、鍵となるのが「自然」という言葉の意味転換であると唐木は言う（唐木「無常」p.335ℓ.16-p.337ℓ.2より）。本来、生が「自然」であり、死が「無常」であるはずが、動乱の渦中にある「兵」にとっては、死ぬことが想定内であるがゆえに、生が「無常」となってしまうのである。こういった、ただ詠嘆的、哀愁的に「世」を表現できない事態に陥ったことによって、はかなしから無常へと移り変わった。今、改めて考えるには、私はこうしたはかなしから無常の変遷を知らなかったために、その違いをよく認識することが出来ず、無常を風流的、情緒的と捉えていたのではないかと分析した。

このことを踏まえたうえで、鈴木大拙の見解を取りあげる。

平安時代の多くの「物語」または「歌集」中に見られるごとき憂愁・無常・物のあわれなどというものは、いずれも淡いものである。人間の魂の奥から出るような叫びは、どこにも聞こえぬ。（鈴木『日本的靈性』p.58ℓ.16-p.59ℓ.2）

これまで述べてきた「はかなし」から無常についての唐木の見解の立場から述べると、先の引用における大拙の指摘は、真っ向からそぐわないものであると考える。特に具体的に述べると、無常は戦乱時代において自ずと「兵」の意識に芽生えたものであり、それ以前の平安時代における文芸作品において見出されるのは「はかなし」である。確かに、大拙の言うようにそれら文芸作品において「人間の魂の奥から出るような叫びはどこにも聞こえ」ないかもしれない。しかし、それは当然のことで、ただ経験していないが故のことではないだろうか。「兵」の無常と、「男女の仲」を哀感し、情緒的に表現することにおける「はかなし」はもはや比べものにならないと私は考える。だが、我々のような現代を生きる若者が戦争を経験したことがないゆえに、戦争体験者の人たちに比べたら圧倒的にその悲惨さ、壮絶さを知らなく、仮に戦争について語ったとしてもその人たちに比べたら、格段に「魂の叫び」が違うのと同様で、言ってみれば仕方のないことではないだろうか。ゆえに、大拙の見解は全くの的外れなものであると私は考える。

この章では、「はかなし」から無常の変遷を辿り、それを踏まえて鈴木大拙の見解について批判的な立場を示した。次章では本稿の主たる内容である唐木の言葉の真意について探ることとするが、その前段階として、鴨長明の『方丈記』は果たして無常を表しているのかについて論じる。これを論じる理由としては、第1章で示したように、「はかなし」と無常との違いを認識できていなかったことにあり、そのことは同様に、無常観と無常においても同様であるのではないだろうか。したがって、本稿においてその違いを示すこと

は必然であると考えた。

### 第3章 「無常とは一根本的範疇である」という唐木の言葉の真意を探る

一般に、無常という言葉を知ると自ずと無常観という言葉に結び付けられるのではないだろうか。無常観を軸に書き綴った鴨長明の『方丈記』が有名である。『方丈記』は、彼自身の壮絶な経験を基にした人生論、住居論、環境論であり、無常観をベースにしたと言われている。有名すぎるほどに有名である。しかし、本稿の結論より示すと、鴨長明は、無常観を表現してはいたが、無常においてではない。だがここで注意しておきたいのが、著作が劣っているという訳では決してないということである。唐木は鴨長明について、次のように語っている。

長明も無常を語ることに於いて、美文調、雄弁調であるが、それがそうになっているのは、無常をむしろ享受し、無常を楽しんでいるのではないかと思われる節がある。彼はいわば方丈における美的生活者、ダンディであった。無常なるものを無常なるものとして捨てたが、捨てえない最後のものとしておのが数寄として残り、その数寄事において堪能した。(唐木 『無常』p.4200.14-p.4220.1)

長明についての見解より、「美文調、雄弁調」より無常を語っている時点で、無常そのものではないことが窺える。この特徴は詳しく言うと、前章で述べたように王朝女流文芸の「はかなし」に近い。しかし、一方で長明はむしろ「美文調、雄弁調」的に無常を作り上げ、楽しんでいるとさえ思える。粋や洗練さを好み、態度や身なり、生活観からそれを誇示する、ダンディズムであるという。無常なるものを捨てながらも、数寄だけは残し、そこにおける数寄事を堪能していた。これはつまり、荒んだ世の殺伐とした空気から逃れ、しかし、自身の数寄、要するに風流を好むことだけは捨てきれずに残り、その数寄事において、荒んだ世の中を考察したということだと解釈した。

ところで、何故「美文調、雄弁調」より語るのは、無常と言えないと考えるのか。これについては次の話題にて明らかにする。

ではここで、本稿の主要部となる、唐木の「無常とは一根本的範疇である」という言葉の真意に迫ることにしよう。まず、その箇所を引用することにする。

無常は単に客観対象ではない。自己もまた無常の中にある。無常は反って主体的事実である。また無常は、「はかなし」という心理の上にあるのでもなく、無常感という情緒の上にあるのでもない。反って無常は自他をふくめての事実、根本的事実である。(中略)無常は事実であるとともに、唯一の範疇、根本的範疇である。(唐木 『無常』p.4800.5-0.9)

この箇所は、文献の裏表紙にも書かれており、私が考えるにはこの言葉こそ唐木自身の主張で最も大事なところである。

単に主観に対する客観的立場、つまり、面前の切り取られた断片的な事象が無常という訳ではなく、主観と客観、その両者の要素を内に含むことが無常であると解釈した。この解釈が正しければ、無常感とは世のはかなさや自分の不甲斐なさ、救いようのなさを憐れんだり、儚んだりする印象が強いが、それはいわば主観性を優位的に含むものである。ちなみに、唐木の先の引用では、「はかなし」と無常感がそれぞれ違うもののように区別されていたが、「はかなし」はほぼ無常感と同じであると見做してしまって不都合ないと考える。話を戻して、無常観について言えば、無常を「観」している、つまり例えば、鴨長明が『方丈記』にて世の風潮を皮肉り、批評していたが、雄弁的な点でそれについてもやはり主観的な要素が強く、無常ではない。無常はそのように主観対象でもなく、けれども客観対象でもない。客観対象とは要するに、天気であるとか、起きた出来事そのものであるとかを指す。しかし、無常とは「主体的事実」であり、「自他を含めての事実」である。したがって、人々の感性や心情、そして世界の客観的事実さえも含めた、ありありとした世界そのもののことである。無常の中においては、我々主観の対象も、客観の対象をも含んでいる。だから詠嘆や情緒的なものは、無常それ自体ではなく、無常という世界を表現するがゆえに起こった、いわば無常から抽出された無常観という技法、もしくはそれよりも更に俗的な無常感であると言える。

「自他を含めての事実」という言葉に直面した時、私は西田幾多郎の『善の研究』（1950）を想起した。そして、ここにおいて唐木と西田の共通点があるのだということに気付いた。西田は『善の研究』においてこのように述べている。

純粹経験においては未だ知情意の分離なく、唯一の活動である様に、また未だ主観客観の対立もない。主観客観の対立は我々の思惟の要求より出でるので、直接経験の事実ではない、直接経験の上においてはただ独立自全の一事実あるのみである。見る主観もなければ見らるる客観もない。

（西田 『善の研究』 p.800.14-p.810.2）

西田の見解に即すると、純粹経験においては知情意が区別されていなく、主客が未分であるという。主客の区別がもし為されている段階であったとしたら、それは純粹経験ではなく、そこからいわば抽出された我々の思惟的な要求の作用によるものである。例えば風が吹くことを例にして説明する。我々が風を感じた時、その瞬間において、その風を感じる私と、感じられる風がある。しかし西田の見解に則ると、その感じる私、と感じられる風、という主観客観の対立構造で表現されている段階で、私の思惟的作用によって風が唯一の活動ではなくなっているのである。逆に言うと、その風を詳しく述べる時、一方で風という客観的事実がないと前提として成り立たないのであるが、他方で風を感じる私という主観の対象も必要である。それは当たり前であるが、物事について説明する際、必

ず、能動対象と受動対象が存在するからである。更に具体例で説明すると、今私の目の前に時計があるがそれを見る際、見る側としての私と、見られる側の時計が存在する。この時、出来るだけ忠実に純粹経験を説明するとどのようになるか。それは、その瞬間においての時計そのものという一事実である。その中には見る私と見られる時計という主客両方が含蓄されている。それが純粹経験である。この純粹経験における特徴は唐木の言う無常とほとんど同一と言って良いのではないかと考える。

唐木の「無常とは一根本的範疇である」という言葉から幾分か逸れてしまっていたので、話を戻すことにする。「自己もまた無常の中」にあり、「主体的事実」であり、「自他を含めての事実である」、この唐木の言う無常は主客をも凡て含蓄した世界のあり方そのものであるのだという。しかし、そこを感じようとするに至ると無常ではなく、情緒的なもので以て表現される、無常観、無常感となるのだと考える。

唐木が無常を言う上でその本質に最も近いと考えていたのが道元（1200-1253）である。端的に言うと、道元の無常は身心脱落、要するに仏道修行によって他の凡てを捨て、そこにおいて、

「一切が無常であるというところでは、無常への詠嘆は意味をもちえない。無常ということすら意味をもたない」(唐木「無常」p.5530.13-14)。

唐木によると、道元の無常は、母親の死の悲しみ、時代、社会の激変、一門の衰退といった体験故の深さであった。確かに、そのような渦中にいれば、欲も、意思も持てず、ただ無常という自他を含めての事実のみが面前にありありと迫って来るであろう。しかし、もはや無常ということすら意味を持たないというのもよく分かり、いわば、絶望をも超えた無の境地である。それこそが道元の、無常観でも、無常感でも、はかなしでもない、無常それ自体であったのだと考える。これにおいて一体、美文調や詠嘆が生まれ出るのだろうか。仮に美文調、雄弁が出るとしてもそれは後日語られる場合においてであり、無常の事態に陥った時はそのような思考にさえ至らないのではと考える。例えば、自身が絶望の淵に陥る、もしくはそれを超えた事態となったことを想像してほしい。その時それを何か装飾付けて語ろうとするであろうか。その場合、おそらく何も語れない、語ろうとしない、もっと言うと言葉さえ出てこないであろう。それと同じである。

結論として、私がもともと持っていた芸術的であるとか、風流さがあるといった無常の特徴は正確ではない。無常とは、中世女流文芸において活発となった「はかなし」であるとか、鴨長明が『方丈記』において表現したような無常観とは区別されるべきものである。もはや無常ということさえ意味を持たない、自他を含めての世のありようそのものが無常である。

終わりに

本稿において示したのは、主観客観といった自他を含めての事実それ自体が無常であるということであった。またそれは、「はかなし」や無常観といった雄弁、詠嘆的に語られるものとは区別されるものであることも示した。

ただ、今の段階において、十分に唐木の思想を解釈し、論の展開に繋げることが出来たとは全く思っていない。引用における「根本的範疇」であるとか、そういった言葉の解釈をはっきりと示すことが出来ていないこと、また、無常について言う時、雄弁や美文調になることに関して、どの時点のことであるかはっきりとしてないことが一番の問題であるように思う。具体的に言うと、無常という渦中にいる際、確かに美文調、雄弁になることは無常たり得ていないと言える。しかし、あえて無常を語る時、雄弁となり、それを文字に起こす際、美文調になるという傾向が日本人の強い傾向であると唐木は言う（唐木「無常」p.414ℓ.5-ℓ.6より）。ここにおいて浮かび上がる問題は、無常を語ることは可能であるかについてである。私は、無常それ自体を語ることは不可能であると考えている。それは、唐木が言うように、確かに無常について語る時、雄弁となり、それを文字で表現する際に美文調になるのは、日本人の強い特徴であるかもしれないが、一方で本論において無常の真意であると言ったように、無常は世界のありようそのものであり、自他をも含めた事実である。ゆえに、雄弁、美文調において無常を語るのは、言い換えると無常を誇張することでもあり、自他をも含めた事実である無常とは言えないのではないだろうか。これについて、私が解釈した限りでは、唐木は定義づけていない。無常の問題はそういった矛盾性を孕んでおり、これを解決するための課題は山積みである。以上、示したことについて本稿にて論じた主張と、唐木の主張を照らし合わせることでその整合性を図り、それを次年度の哲学研究に生かしたいと思う。

(総字数 7,602)

#### 参考文献

唐木順三『唐木順三ライブラリーⅢ 中世の文学 無常』、粕谷一希解説、中央公論新社、2013年9月10日初版発行

西田幾多郎『善の研究』、岩波書店 1950年1月10日第1刷発行、  
2012年3月16日改版第1刷発行  
2018年2月15日第7刷発行

鈴木大拙『日本的靈性 完全版』、KADOKAWA、2010年3月25日初版発行  
2020年8月10日第23版発行